

ケネーの「経済表」とスミスの「諸国民の富」

— Citoyen, Citoyenneté と Commercial Society —

東 條 隆 進

目 次

1. はじめに
2. ケネー「経済表」の世界
3. 「経済表」と経済循環
4. 租税と資本・利子の自然的秩序
5. スミスの「経済表」理解と「諸国民の富」
6. 結論

1. はじめに

本論は、ケネー (François Quesnay) の「経済表」(Analyse de la formule arithmétique du Tableau Économique) が書かれた18世紀フランス経済社会の Société Civile (Citoyen) を解明することと、スミス (Adam Smith) の「諸国民の富」(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*) が書かれた18世紀イギリスに進行した Civil Society (Commercial Society) の特徴を比較解明し、経済学成立の一断面を解明することを目的としている。

ケネーは1756年[百科全書]に「小作人論」Fermiers (Économie Politique)、1757年[百科全書]に「穀物論」Grains (Économie Politique)・「貨幣利子」Interet de l'argent・「人間論」Hommes を発表した¹⁾。1758年か1759年に「経済表」TABLEAU ÉCONOMIQUE の第一版並びにその「説明」Explication と、「シュリイ公の王国経済の抜粋」Extrait des économiens royaux de M. de Sully の名のもとに MAXIMES generales du gouvernement économique を発表した。この書はベルサイユ宮殿で作られた四つ折形の豪華版で公表された²⁾。

オリジナルな形での「経済表」は周知のごとく失われたものと考えられているが、それから二年後(1760年)にミラボー侯爵がこれを自由に改訂したあとで「経済表並びにその説明」という表題で一般に公開した。その後ケネーは「農業・商業・財政評論」の1766年に「経済表の分析」Analyse de la formule arithmétique du Tableau économique de

la distribution des dépenses annuels d'une nation agricole を発表した。

2. ケネー「経済表」の世界

「経済表の分析」はソクラテスの「農業が反映すれば、他のあらゆる文化はそれと共に栄える。しかし、いかなる原因にもせよ、耕作が放棄されるに至るや、海陸を問わず一切の活動は、それと共に衰退する」と言う「クセノフォン」からの引用文を掲げた³⁾。

Εὖ μὲν γὰρ φερομένης τῆς γεωργίας ἔρρωνται καὶ αἱ ἄλλαι τέχνη ἀπασαι οἴου δ' ἂν ἀναγκασθῆ ἢ γη χερσεύειν, ἀποσθ ἐννυνται καὶ αἱ ἄλλαι τέχνη σχεδόν τι καὶ κατὰ γῆν καὶ κατὰ θάλατταν.

ΣΩΚΡΑΤΗΣ ἐν Ξενοφών.

Lorsque l'agriculture prospère, tous les autres arts fleurissent avec elle; mais quand on abandonne la culture, par quelque cause que ce soit, tous les autres travaux, tant sur terre que sur mer, s'anéantissent en même temps.

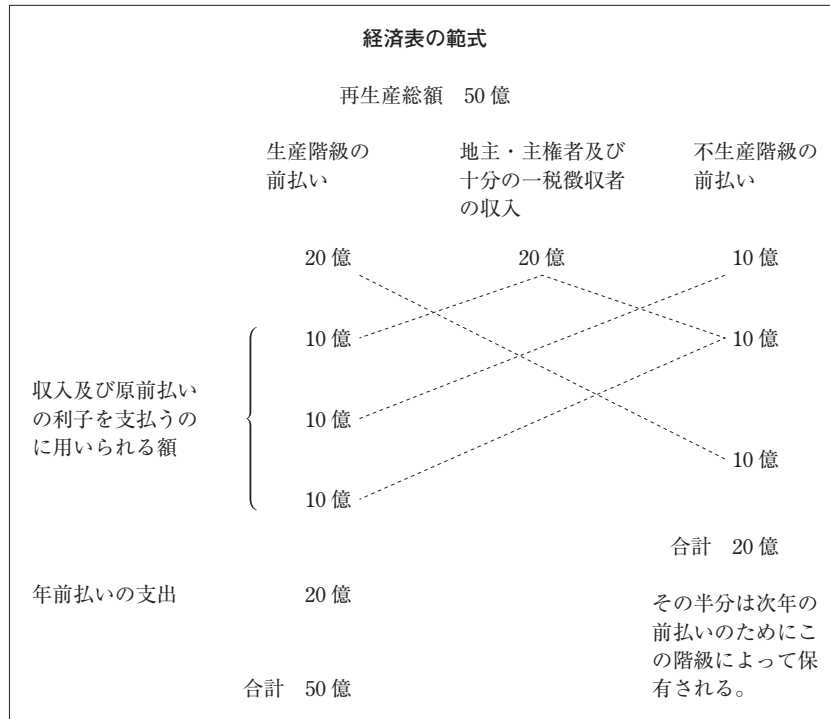
SOCRATE dans *Xénophon*.

「経済表」Tableau Économique の「分析」Analyse は「クセノフォン」でのソクラテス言説からの引用で始まった。

ヨーロッパ・ハイウェイの源流としての古代ギリシャ・アテネの哲学の教師ソクラテスの言説から農業の重要性を引用し「経済表」の標語にしたという事は、ケネーが経済世界の自然法的秩序の根本に農業を据えたという事である。Économique の本質は農業にある。そしてその本質を分析によって解明する。しかも経済表の算術的範式として記述するという業績を残した。Économique の「農業国民の年支出の分配に関する経済表の算術的範式の分析」である。

「経済表」Tableau Économique の「算術的範式」La Formule Arithmétique によって経済学のパラダイム・カテゴリー・モデルの発見が可能になる。そしてこのケネーの「経済表」の「算術的範式」の重要性を最初に紹介したのが1914年に発表された J. A. Schumpeter の「Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft」であった。「経済循環の発見」(Der Kreislauf der Wirtschaft, the Circular Flow) である。

ケネーは「国家」・「国民国家」(la nation) の経済的根拠の解明から出発する。アンリ四世によって成立したフランス国民国家である。「シュリイ公の王国経済からの抜粋」という仕方でヨーロッパ中世から近世への転換を位置づけ、しかも自然法的伝統に乗せた。



「アンリ四世の大計画」国家体制である。諸国民国家連合体制であり、近代的国家体制の特徴としての租税 (impot) 国家体制である。そしてこの国家の機能の担い手として三つの階級 (a trois classes de citoyens) を挙げる。生産的階級 (classe productive)、地主階級 (classe des propriétaires)、不生産・不妊的階級 (classe stérile) である²⁾。「王国」La grand Royaume が Citoyen として生産的階級 (classe productive)、地主階級 (classe des propriétaires)、不生産階級 (classe stérile) として構成されるという事は、「階級」(classe) という概念範疇が経済的概念範疇に属しているということである。Citoyen (市民) もケネーにおいては経済的範疇に属しているということである。L'ordre naturel (II, p. 797), 社会的秩序 (l'ordre de la société) は市民社会である。(Sur les travaux des artisans, François Quesnay et La Physiocratie, II, p. 888)⁴⁾

第一の Citoyen としての Classe productive は Entrepreneurs de la culture, entreprises d'agriculture (土地と耕作企業家) から構成されている。生産的支出を支出する経済的機能になっている。(II, p. 895) Classe productive が Entreprise で構成されているという事こそ Société Civile の中核を形成するのが Entreprises であるということである。Entreprises が土地の耕作によって国民の年々の富 (richesses) を再生させ、農業の仕事の支出の前払い (avances) をなし、地主の収入を年々支払う階級である。生産物の最初

の担い手から売上までになされるすべての仕事及び支出は *entreprises* が担う。土地の耕作によって国民の年々の富を再生させ、生産物の売上高すべての労働 (*travail*) に対する支出も *entreprises* が担う。国民の富の *reproduction annuelle* (年再生産) の価値はこの生産物の売上高によって知られる。

第二の *Citoyen* としての *la classe propriétaires* は主権者・地主および十分の一税徴収者を含んでいる。この階級は、*revenue* (収入)、すなわち耕作の *produit net* (純収入) によって、生活している。この純収入は、生産階級が年々再生させる再生産のうちから *avances annuelles* (年前払い) の回復と経営資本の維持とに必要なだけの富をまず控除したのち、地主階級に年々支払う額である。

第三の *Citoyen* としての *la classe stérile* (不生産的・不妊的階級) は農業上の勤務・労働以外に従事する人々のすべてによって形つくられ、その支出は生産階級および地主階級によって支払われる。生産階級が年々再生させる再生産から年々の前払いの回復および経営上の富の維持に必要なだけの富を先取りした後、この階級に年々支払うところの耕作の収入すなわち純生産によって生活する者である。

3. 「経済表」と経済循環

シュリーーによってはじめて近代国民国家の使命が規定され、ケネーによってはじめて国民国家の生産力—再生産力と言う観点から、*Citoyen* としての *la classe productives, la classe propriétaire, la classe stérile* という生産関係階級規定がなされたのである。そして形成されつつある近代国民国家の関係と市民社会の関係が租税国家と市民社会の経済階級関係として、*entreprises* による *le revenue, paye, vente, prix* の流れとして把握された。*Richessee, produit net, avances* の関係が *une reproduction de la valeur* (価値の再生産) の流れとして把握された。ちょうど人体の血流における動脈・静脈の循環過程とおなじ国家・市民社会の生産関係・交換関係・再生産関係の循環過程を発見した⁵⁾。

ケネーは「シュリーー公の王国経済」[*Extrait des économies royales de M. de Sully*] をモデルとした一つの国家 (*un grand royaume*) での経済行為から出発した。農業が最高度に発達していて、毎年 50 億フランの価値の再生産が恒常価格 (*les prix constants*) で遂行される「経済表」*tableau* から出発した。この恒常価格 (*le prix constants*) は商業上の自由競争 (*une libre concurrence de commerce*) と農業の経営資本の所有の絶対安全とがつねに存する場合におこなわれる価格である。(une entiere surete de la propriete des richesses d'exploitation de la l'agriculture) (II. p. 794 ~ 795) ここで再生産が *une reproduction de la valeur* (価値の再生産) として把握され、*produit net* (純収益) が *le revenue* (収入)、*revenue* (収入) と *paye* (支払い) の関係として *vente, prix* (価格) 関係として把握され

た⁶⁾。

「経済表」は三階級とその年々の富 (richesse) を包含する⁷⁾。

まず生産階級は年前払い (avances) として20億を得て、それで50億の生産 (produit) を遂行し、そのうちの20億を純収益 (produit net) すなわち収入 (revenue) として獲得する。地主階級は収入として20億獲得し、そのうちの10億は買い入れのため生産階級へ、他の10億は買い入れのため不生産階級に支出される。不生産階級の前払いの額は10億であって、それは不生産階級によって原料の買い入れのため生産階級に支出される。こうして生産階級はその生産物のうち10億を収入の所有者に販売し、10億を不生産階級に販売する。不生産階級は工作物の原料として生産階級から購入する。計20億である。

収入 (revenue) の所有者が買い入れのために不生産階級へ支出した10億は、不生産階級を構成する人々の生活に要する生産物を生産階級から買い入れるために不生産階級によって用いられる。計10億である。

収入の所有者および不生産階級が生産階級から買い入れる額の総和は、計30億。生産階級が生産物30億を販売して得た30億のうち、20億は本年の収入として地主に支払われ、不生産階級からは工作物購入額として10億支出する。不生産階級は工作のために使用した原料の買い入れのために生産階級へまず前払い (avances) を支出し、その前払いの回収にする。したがってこの前払いは何も生産しない。(Ainsi ses avances ne produisent rien; elle les depense, ells lui sont rendues, et restent toujours en reserve d'annee en annee. (p. 796))

不生産階級はそれを支出し (paye) 取り戻す。年々留保されるにとどまる。原料と工作のための労働 (travail) は不生産階級の売上高を20億にするが、そのうち10億はこの階級の生活のために支出される。そこでは消費すなわち生産物の消失あるのみで何ら再生産は生じない。この階級はその労働報酬支払いによってのみ生活するが、労働は生活資料のための支出と切り離しえず、したがってその生活は純然たる消費的支出であり、この不生産的支出は支出のために消失した物の再生産もなく、まったく地域の再生産からのみ取得されるにすぎない。他の10億は不生産階級の製作する工作物の原料を生産階級から次の年新たに買い入れるのに使用される前払いの回復として取り置かれる。(Le revenue des propriétaires peut être alors égal aux avances annuelles. Mais ces données ont des conditions CINE QUABUS NON; elles supposent que la liberté du commerce soutient le débit des productions à un prix, par exemple, le prix du blé à 18 livres le setier; elle suppose d'ailleurs que le cultivateur n'ait à payer directement ou indirectement d'autres charges que le revenu: p. 797)

こうして生産階級が収入の所有者と不生産階級へ売り上げて得た30億は、この生産階

級によって、本年度の収入支払いに 20 億、不生産階級への工作物買い入れのための支払いに 10 億用いられる。この経済表の Zig — Zag は一般に「略表」と呼ばれる、上記のような範式として記述された。

4. 租税と資本・利子の自然的秩序

このような Citoyen の諸階級関係が自然的秩序 (l'ordre naturel) を形成する。近代国民国家は租税国家として成立する。租税 (l'impôt) 形態が国家の秩序を決定する。租税国家は経済循環を保障 (保証) するか⁸⁾。

租税と自然的秩序

「地主 (les propriétaires) ・主権者 (le souverain) 及びすべての国民 (la nation) には、租税 (l'impôt) が全く土地の収入に直接課せられることが多大の利益である。何となれば他のあらゆる課税形態は、再生産及び租税を害し、また租税そのもののうえに租税のかかることになり、ために自然的秩序 (l'ordre naturel) に反するからである。」(p. 797)

利子と自然的秩序

さらに利子 (interets) は自然的秩序たり得るのか。

「原前払いは年前払いより約 5 倍だけ大きい。年前払いが 20 億であるとの現在の仮定においては、原前払いはすなわち 100 億であって、一年の利子 10 億は一割の割合に過ぎない。それによって弁じねばならない支出の量を考えれば、その用途の重要性を思うならば、それなくして小作料および租税の支払いが決して保証されず、社会の支出の再生は消滅し、経営資本の貯えは、したがって耕作は消え失せ、この荒廃は人類の最大部分を絶滅し他を森林に引き戻すことを勘考するならば、耕作における消滅すべき前払いの利子が一割であるのは高すぎるどころではないことをしるだろう。」(p. 799)

1758 年の 12 月に王に提出された版本での覚書では「経済表並びにその説明」と「経済統治の一般準則」は「シュリイ公の王国経済の抜粋」という題名のもとに王に提出された。しかし「租税論」(1760 年)を公刊したために王の信任を失った。それが原表と略表の決定的相違を生んだ。

かって久保田明光は原表では社会の富の再生産を地主階級の所得の再生産を中心に考察し略表では生産階級の経営資本の再生産に重点を置いた点に注目し、原表が三階級間の富の流通分配の関係を直接には各階級に属する個人間の関係として図示したのに対し略表では階級相互間の関係として示したことを明らかにした。原表では個人所得の流通分配から理想社会の人口数を推算しこれから理想社会の総国富特に国民的総収入を考察したのに対し、略表ではこの最後の考察を前提にし理想社会の資本及び収入の年々の再生産の条件としての国民的総生産物の循環を示していることを明らかにした。(久保田明光 (昭和 37)、

64 ページ)

「略表」への租税・資本・利子概念の埋め込み

そしてもう一つ、略表は租税の根拠と資本・利子の根拠を示した。その根拠を「算術的範式」として作図・記述するというユークリッド「原論」の精神を示した。

生産階級が地主階級 (propriétaires)・主権者 (le souverain) に租税 (impot) を支払う過程から出発する。生産階級が年前払い 20 億をもって再生産総額 (la production totale) 50 億を再生産する。この過程で年前払いが 250% の再生産を生みだす。地主の収入は年前払いと同額とする。それで自由な取引が生産物の売り高を良価 (bon prix) の状態に維持する。この良価が麦の値段を 1 セチエにつき 18 リーブルに維持すると仮定する。そして、耕作者も直接または間接に支払うべき租税を収入以外に持たず、その収入の一部分たとえば 7 分の 2 は主権者の収入を形つくらなければならぬことを仮定する。20 億の総収入のうち、主権者の受ける部分は 5 億 7200 万である。地主のそれは 7 分の 4 すなわち 11 億 4400 万である。10 分の 1 税の徴収者のそれは税とともに 7 分の 1 すなわち 2 億 8600 万である。国民の富の再生産を衰微させずこれほど大きな公収入をもたらし得る課税方法はほかにはない。

LES REPRISES de la classe productives (生産的階級の回収)

再生産総額 50 億のうち、収入の所有者および不生産階級は、彼らの消費のために 30 億だけ買い入れた。したがって生産階級の手許にはまだ生産物 20 億が残っている。この階級はそのほか不生産階級から工作物 10 億を買い入れた。かくて生産階級の年々の貯えは 30 億となる。この貯えは消費されるが、その消費をするのは如何なる人かと言うと、耕作の年前払いによって支払われるこの階級の色々な仕事にたずさわる種々の人々であり、後述する利子によって支払われる創設の資本 (fonds de l'établissement) の日々の色々な修復にたずさわる種々の人々である。

かくて生産階級の年支出 (depense annuelle) は 30 億である。すなわち、この階級がその消費のために保有する生産物 20 億、および不生産階級から買いいれる耕作物 10 億である。

この 30 億は生産階級の回収 (reprise) と呼ばれる物を形つくる。そのうち 20 億は、年前払いを構成する。この年前払いは、消費によって消失する支出を回復し永続させるためにこの階級の年々再生させる 50 億の再生産の直接労働のために消費される。他の 10 億はこの階級によって、その創設の前払い〔原前払い〕の利子としてその売上高から天引きされる。

この利子の必要な理由は以下の通りである。現前払いを構成する経営資本の貯えは日々損耗するから不断の修復を必要とするが、この修復は、この重要な貯えがつねに同一の状態を保ちそして破滅に近づくことのないようにするために必要である。この破滅が耕作を

破壊し、したがって再生産を不可能にし、したがって国富を破壊し、人口増加を破壊する。

耕作は自然災害によって作物の被害をこうむるが、もし耕作者が予備資金を所有していなかったら、災害を被ったとき地主や主権者に支払うことが出来なくなり、次年の耕作の支出も不可能になる。主権者と地主は耕作者に支払いを命ずる権力を持ち、耕作破壊の影響が主権者・地主・十分の一税徴収者のみならずすべての民に降りかかる。それゆえ耕作者が創設した前払い利子は彼らの年回収 (reprises annuelles) のなかに含まれる。この利子は大災害に対処し、修復を必要とする経営資本の維持のために用いられる。原前払いは年前払いより約5倍大きい。年前払いが20億の時、原前払いは100億であり、したがって一年の利子10億は一割である。この利子で小作料と租税支払いを社会の支出の再生のための経営資本の維持に用いられる。

「算術的範式」と Zig — Zag 過程

総額50億は、まず生産階級と地主階級に分配される。この50億は同額の年再生産を永久に保証する規則的秩序に従って年々支出される。10億は地主階級から生産階級への買い入れのために支出され、残りの10億は地主階級からの不生産階級への買い入れのために支出される。生産階級は生産物30億を他の二階級に販売するが、そのうち20億を収入の支払いのために返済し、10億を不生産階級に対し買い入れのために支出する。こうして不生産階級は20億を受取り、生活資料と工作物原料買い入れのために生産階級に対して支払う。生産階級は自ら生産物20億を年々支出する。これで年再生産50億の支出または総消費は完了する。以上が生産階級が再生産50億の支出総額に含まれる年前払い20億の支出によって年々再生させる50億の支出の分配の規則的秩序である。この支出の分配の算術的範式 (formule arithmetique) は次のように書かれる。

右上には本年の収穫を生ぜしめる前年に支出された生産階級の前払いの額がある。この額の下には、それと、この階級が受け取る額の欄とを分つ線がある。左上に不生産階級の受け取る額がある。中央上のは収入の額であって、それが支出される二階級へ右と左に分配される。支出の分配は収入の額から出発し斜めに下って一および他の階級へ動く点線で示される。この線の端にある額は双方とも収入の所有者が買い入れのためにこれらの階級の各へ支出する額である。二階級間の相互取引も一より買い入れのなされる他の階級へ斜め下に動く点線によって表わされる。そして各線の端にある額は、支出のために二階級間で行う取引によって、相互に両者の一が他から受け取る額である。ここから 生産階級の年前払い総額50億、不生産階級総額20億が出てくる。自然的秩序の下では支出分配は、生産階級の受け取りはその前払いを込めて、年再生産総額に等しいことが示される。また耕作・富・人口は増減なく同一状態に保たれる。

それゆえ地主が土地を改良しその収入を増加するために、不生産階級へよりも生産階級

へ多く支出するならば、生産階級の労働に使用される支出の増加はこの階級の前払いの増加と見られるべきである。繁栄の状態では生産階級と不生産階級間で同等に分配される。しかし生産階級は支出の三分の一しか不生産階級に渡さない。耕作者の支出は地主の支出よりも処分が不自由だからである。農業が衰弱すればするほどこれを再興するために処分できる支出の一部をますます多く農業に捧げなければならなくなる。

「我々はすべての耕作者が年払いのほかに、原前払いの利子として一割を年々保有するというのではない。かくの如きは繁栄の状態の主要条件の一つであるというのであり、一国においてかくの如くでなければつねにこの国は衰微し、また年を追うて次第に衰微し、その進行が知られるならば、計算によって全滅の時期を予知することが出来るのである。さらにまた、国民にとって耕作の前払いの資本くらい有利に投下せられたる資本は、労力と智恵の使用とをこの資本のい結合する小作人に対し、怠惰なる金利生活者に支払われる利子と少なくとも同じほどの年利子も当然もたらさねばならぬというのである。」(p. 799, 戸田正雄・増井健一訳(昭和8)、48ページ)

ケネーの経済表は近代租税国家成立条件としての租税の根拠と経済的生産力の担い手としての Citizen の根拠と Société Civile としての経済循環の可能性を追求したものであった。

5. スミスの「経済表」理解と「諸国民の富」

スミスは「国富論」第4編第9章でケネーの「経済表」を取り上げて論じた。

「政治経済学における農業の諸体系は、私が重商主義つまり商業の体系に加える必要があると考えたほど長い説明を必要としないであろう。」(Adam Smith (1981) II. pp. 663-664) 土地生産物をあらゆる国の収入と富の唯一の源泉と主張する体系は、私の知る限り、まだどのような国民によっても採用されなかったもので、現在のところ、それはただフランスの博学で創意に富んだ少数の人々の思索のなかに存在するだけである。世界のどのようなところにもまだ何の害も与えたことがなく、またおそらくこれからもけっして害をあたえようとはおもわれぬ一つの体系の誤謬は、たしかにくわしく検討にはあたいますまい。

この体系にしたがえば、土地の年々の生産物の総量はどのようにして上述の三階級のあいだに分配されるか、また、不生産階級の労働が、この総量の価値をいかなる点においても増加することなく、それ自身の消費物の価値を回収するにすぎぬのはどういうわけか、などということは、「この体系のきわめて独創的でふかい学識をもつ創始者ケネー氏により、若干の算術的公式の形であらわされている。これらの公式のなかの第一は、かれがとくに「経済表」と名づけて他と区別しているのであって、それは、もっとも完全な自由の、したがってまた最高度の繁栄の状態に置いて、すなわち、年々の生産物が最大限に可

能な純生産物を提供し、各階級が年々の生産物の全部についてそれぞれの適正な分け前を享受する状態において、この分配がどういうふうにおこなわれるか、ということについてかれが想定するところをあらわしている。」

それに続く若干の公式は、制限や規制がさまざまにおこなわれる状態において、すなわち、土地所有者の階級かまたは不妊的で不生産的な階級のいずれかが耕作者の階級よりも優遇され、前二者のうちのいずれかが本来この生産的階級に帰属すべき分けまえを多少とも蚕食する状態に置いて、この、分配がどういうふうにおこなわれるか、ということについてかれが想定するところを現わしている。

この体系によれば、こういうあらゆる蚕食、つまりもっとも完全な自由が確立するであろう自然的配分のあらゆる侵害は、必然的に、年々の生産物の価値と総量とを年を追って多かれすくなかれ衰退させるにちがいないし、社会の実質的な収入と富を徐々に衰退させるにちがいないのであって、この衰退が急速か緩慢かということは、この蚕食の程度に応じる、つまりもっとも完全な自由が確立するであろう自然的配分が多かれすくなかれ侵害されるその程度に応じるにちがいない。

経済表の公式をケネーは人体における血液の循環に相当する社会の経済循環の可能性としての公式として用いたのに対し、スミスはケネーが「土地所有者の階級かまたは不妊的で不生産的な階級のいずれかが耕作的階級よりも優遇され、前二者のうちのいずれかが本来この生産的階級に帰属すべき分け前を多少とも蚕食する状態において、この分配がどういうふうに行われるかということに彼が想定していることを現わしている」とし、「もっとも完全な自由が確立するであろう自然的配分のあらゆる侵害」というように把握している。

スミスは「経済表」の世界をコルベールの重商主義体系という「曲げすぎた棒をまっすぐにするには、その反対のほうへ同じだけ曲げなければならない、と」して、「農業はあらゆる国の収入と富の唯一の源泉だという体系を提唱した」とした。(II. pp. 663-664)⁹⁾

スミスはメルシェ・ドウ・ラ・リビエールの「政治社会の自然的本質的秩序」批判を目的としている。この学派のすべての人々は、極めて多数にのぼるかれらの著作、しかも本来政治経済学とよばれるべきもの、すなわち諸国民の富の性質と諸原因をとりあつかうばかりでなく、市民政府の体系の他の全部分をもとりあつかう著作に置いて、暗黙のうちに、目につくほどの変更も加えずに、ケネー氏の教義にしたがっている。

自然的自由の体系としての「諸国民の富」

スミスはケネーの経済表の世界を規制の世界として位置づけ自分の体系「諸国民の富」の世界を「自然的自由」system of natural libertyの体系として位置づけ、そして「自然的自由」の体系として、正義の法内部における労働と資本の自由放任の論理を展開した。自然的で単純な体系がおのずから確立される。あらゆる人は、正義の法を犯さない限り、各

人各様の方法で自分の利益を追求し、自分の勤労と資本の双方を他のどの人または他のどの階級の人々のそれらと競争させようとも、完全に自由に放任される。「主権者は、それを遂行しようとするれば必ずつねに数限りない欺瞞におちいり、また、それを適切に遂行するには人間の英知や知識のかぎりをつくしてもなお不十分にしかなしえない義務、すなわち私人の勤労を監督したり、またこれを社会の利益にもっともよく適合するもろもろの職業へむかわせるという義務を完全に免除されるのである。」

スミスはこの社会を Commercial Society（商業社会）と呼んだ。

自然的自由の体系によれば、主権者が注意すべき義務はわずか三つしかなく、そしてこの三つの義務はもとよりきわめて重要であるが、誰にでも理解できる平明で分かりやすいものである。すなわち第一はその社会を他の独立の社会の暴力や侵略から保護する義務であり、第二は、その社会のあらゆる成員の不正または圧政から出来る限り保護する義務、すなわち厳正な司法行政を確立する義務であり、第三は、ある種の公共土木事業と公共施設を建設する義務である。（II, p. 687）

そしてこれらを建設し維持することは、決してあるまたは少数の個人の利益になりえない、というのは、たとえその利潤は一社会にとってその経費をつぐなうてなお大いにあまりあることがあっても、ある一個人または少数の個人にとってはとうていそれをつぐなえないからである。

スミスは Commercial Society の構想を「諸国民の富」の構想として次のように述べた。

「あらゆる国民の年々の労働は、その国民が年々消費するいっさいの生活必需品や使役品を本源的に供給する元本であって、これらの必需品や便益品は、つねにこの労働の直接の生産物か、またはこの生産物で他の諸国民から購買されるものかいずれかである。それゆえ、この生産物またはそれで購買されるものが、それを消費すべき者の数に対する割合の大小に応じて、その国民は、必要とするいっさいの必需品や便益品を十分に供給される事になるであろう。しかしこの割合は、どのような国民のばあいにも、二つの異なる事情、すなわち第一に、その労働が一般に充用される場合の熟練、技巧および判断、また第二に、有用な労働に従事する者の数とそういう労働に従事しない者の数との割合によって規制されざるをえない。」（Adam Smith（1981）, pp. 10～12）

こうして「諸国民の富」の第一篇から第五編までの体系が展開された。

第一編の主題は「労働の生産諸力におけるこの改善の諸原因と、またその生産物が社会のさまざまな階級や境遇の人々の間に自然に分配される秩序」の研究である。

第二編の主題は資本的資材の性質、それがしだいに蓄積される態様、さらにそのさまざまな使用方法にしたがって活動させられる労働のさまざまな量を取りあつたっているのである。

第三編は「ある国民の政策は農村の産業を異常に奨励し、他の国民のそれは都会の産業

を異常に奨励してきた、あらゆる部類の産業を、同等にしかも公平にあつた国民はほとんどまったくなかった。ローマ帝国の没落以来、ヨーロッパの政策は、農業、つまり農村の産業よりも、諸技術、製造業および商業、つまり都会の産業を優遇してきた。こういう政策を導入し確立させたと思われる諸事情」を説明する。

第四編では「政治経済学の……あるものは都会で営まれる産業の重要性を誇張し、他のものは農村で営まれるものを誇張する。これらの理論は、学識ある人々の見解に対してばかりでなく、君主や独立国の行政に対しても、かなりの影響を及ぼした。そういうさまざまな理論について、またそれがさまざまな時代や国民にあたえた主要な効果について」説明する。

第五編では「主権者また国家の収入をとりあつかっている。……第一に、主権者または国家の必要経費はどのようなものか、……第二に、全社会に義務つけられる経費をまかなうために、全社会が貢納させられるさまざまな方法にはどのようなものがあるか、……第三に、……ほとんどすべての近代政府がこの収入のある部分を担保に供せられるようになったこと、すなわち債務契約をむすぶようになったことの諸理由や諸原因はどのようなものであるか、またそういう債務が社会の実質的富、つまりその土地と労働の生産物におよぼした諸効果はどのようなものであったか、ということをあきらかにしようと努力したのである。」(Adam Smith (1981), I. pp. 10~12)

Division of Labour とは何か。

そしてスミスは第一篇第一章を「分業について」から始めた。「労働の生産諸力における最大の改善と、またそれをあらゆる方面にふりむけたり、充用したりする場合の熟練、技巧および判断の大部分とは、分業の結果であったように思われる。」「分業は、それが導入されうるかぎり、あらゆる技術における労働の生産諸力を比例的に増進させる。さまざまな職業や仕事がたがいに分化するのも、この利益の結果として生じたもののように思われる。そのうえこの分化は、一般に最高度の産業と文明とを享受している国々で最もすすんでいるのであって、社会の未開状態での一人の作業は、文明社会ではいっばんに数人の作業になるからである。」

「農業に従事する労働のさまざまな部門のすべてを、完全にあますところなく分化してしまうのは不可能だということが、おそらく農業技術における労働の生産諸力の改善が、なぜ諸製造業のそれと必ずしもつねに歩調をあわせることができないか、ということの根拠であろう。」(Adam Smith (1981), pp. 13~14)

6. 結論

ケネーの「経済表」Tableau Économique の世界は La nation としての租税 (impôt) 国

家と Société Civile における Citoyen 的経済循環の世界である。Zig — Zag としての経済循環の発見である。「合成の誤謬」を発見した J. M. Keynes も失敗したマイクロとマクロの Zig — Zag のプロセスである。この Zig — Zag をたどる過程で La Classe Srérite というスミスによって誤解された概念を用いた。それがスミスをしてコルベール主義と言う「曲げ過ぎた棒をまっすぐにするには、その反対の方へ同じだけ曲げなければならない」という判断を生み、「経済表」の世界を「農業はあらゆる国の収入と富の唯一の源泉だという体系」にした。スミスは「経済表」Tableau の本質的意義を十分に評価したとは言えない。スミスはケネーの世界を自分の「自然的自由」の体系を構築するための批判材料にした。そのことがスミスが構築しようとした商業主義的市民社会と同じ市民社会の経済学的構造をケネーの「経済表」がもっていた事実を評価しえなかった。とくに Citoyen とは何かと言う事に無頓着であった。それがスミス自身の Division of Labour 論と市場論の十分な統合を困難にさせ、リカードとマルサスの学問的分裂を引き起こしたように思われる。その後の経済学の歴史が Société Civile, Civil Society と Commercial Society の関係に十分考察を加えたとは言えない状況を生み出したのも事実であった。

注

- 1) ケネー François Quesnay (1694–1774) の主要な論文は [百科全書] に発表された。ケネーはエコミスト (Les économistes) とかフィジオクラート (Physiocrats) さらには「重農主義」とか呼ばれているが、広い意味で「百科全書派」と呼ぶべきである。ケネーは「名証論」で「理性の光がなければ、啓示された真理は理解しがたいであろうから。」といった。(平田清明訳 (昭和 34)、269 ページ) 「明証とは、自分の現実的感覚を経験しないことがわれわれに不可能であるのと同じく、拒否することがわれわれにできない確実性を意味する。この定義は、一般的な懐疑論が欺瞞的であることを、悟らせるに十分である。」(269 ページ) 「広がり」の代表的観念から、形状・大きさ・形態・位置・場所・近・遠・量・数・運動・休止・時間の継続・永続性・変化・関係等々の観念が生ずる。」(270 ページ) 「幸福一般・不幸一般・情念一般とかの抽象的一般観念のごとき、無形の観念についても、同様である。これらの抽象観念は、感官を働かせることによって、われわれが感じる感情的感覚の援助によってのみ、理解されうる。」(281 ページ) 「正義という抽象的一般的な人工観念は、報酬の正義・配分の正義・裁定の正義等々の抽象的観念を雑然と含んでいるが、この観念はかかる抽象的にして相対的な観念が関連すべき対象の明晰判明な感覚に、この感覚が還元されない限り、人はそこから正確かつ確実に、しかも名証的に、他の知識をひきだしうる明確な知識をなんら確立しないのである。」(283 ページ) 「たしかに、われわれは、ことばやそれ以外の、協定した信頼にもとづく有形の記号によって、自分の考えを伝えるあう事が出来る。しかし、我々はこれらの記号と感覚のあいだにはいかなる必然的関連も存在しないこと、および、これらの記号は虚偽も真実をもつたえることを、知っている。」(291 ページ)

学問的には Société Civile 派に属している点に注目すべきである。

ルソーは「社会契約論」第一版に「ジュネーブ Citoyen」であることを誇らしげに掲げている。久保田明光はケネーがマルブランシュ派に属した点に注目したがデカルト (Descartes) — マルブランシュ (Malebranche) — ケネー (Quesnay) の哲学線はケネー経済学を理解するうえで極めて重要である。ひろい啓蒙主義哲学の線上にある。(Quesnay, disciple de Malebranche, par Akiteru Kubota, François Quesnay et La Physiocratie (1958), pp. 169~197)

- 2) アンリ四世は 1588 年フランス国王になり、スペイン軍に勝利し国家建設と経済的自立化をシュリ

一公爵 (Sully, Duc de) に託した。アンリ四世とシュリーは「アンリー四世の大計画」というヨーロッパ世界の「諸国家連合」体制計画を残した。1640年シュリーが「王室財政」という著書で展開した。ヨーロッパ諸国の国境線を引きなおし、超国家的体制を構築する計画である。この「大計画」は規模も勢力もほぼ拮抗した数カ国が共存しているという「均衡」equilibriumという概念が基礎にあった。権威、均衡、連合、自己利益という四つの政治的原理から成り立っていた。そしてこの「均衡」はその後のヨーロッパの政治的基本概念になっただけでなくニュートン以降の全自然哲学の基礎概念になって行った。シュリーは古代ギリシャの都市国家間の協力関係であるアンフィクチオン同盟をモデルとして「パン・ヨーロッパ評議会」という統合機関を構想したと言われている。「すべての彼の隣人」にとって大計画が「かれらすべてを安全と友情という強固な結びつきで結合させるものであり、そうなればまるで同胞のような共同生活が出来るようになり、良き隣人として相互に訪問しあえるようにさせる」ことを可能にするものとした。この構想の特徴は自己利益を重視している点である。第一に軍事費の節約による国家の自己利益である。第二に自由貿易に関する、相互協定が締結されることの利益である。第三は自由貿易が拡大することの利益であった。シュリー計画によるとヨーロッパ大陸はほぼ拮抗した勢力の15の国家で構成されることになっていた。この15カ国は6つの世襲王国 (フランス、スペイン、イングランド、デンマーク、スエーデン、ロンバルデー (サボイ))、5つの選帝王国 (神聖ローマ帝国、ローマ教皇国、ポーランド、ハンガリー、ボヘミア)、四つの共和国 (ヴェネチア、イタリア、スイス、ベルギー) である。(東條隆進「EU統合の思想的源泉」早稲田社会科学研究所第8号、1999年)

- 3) クセノフォンからの引用で $\tau\epsilon\chi\nu\alpha\iota$ (tekne) が travaux (travail) となっているがギリシャ語 $\tau\epsilon\chi\nu\eta$ —テクネーが travaux (トラヴァウフ) としてもちいられたのは珍しい。この引用は1766年の Journal de l'agriculture では欠けている。(François Quesnay et La Physiocratie, II, p. 794) ケネー「経済表」の世界を「重農主義」と規定することが許されるのか。むしろ近世自然法の支配する世界と見るべきではないか。ケネーは「自然法」に関する論文の中で自然の法則をもって「あらゆる自然的出来事・規制された経路であって・人類にとって明らかに最も有利なもの」となし、道徳の法則をもって「自然界の秩序に対して適応するあらゆる人間の行為の規則であって明らかに人類にとって最も有利なものである」となし、これら二つの「法則」は併せて「自然法」と呼ばれるものを形成し、かつこれらは不変不易であり、更に「最善の可能な法則」であるとした。(p. 229)

そして Tableau Économique の Tableau とは自然法的秩序そのものではないか。 $\tau\epsilon\chi\nu\eta$ —がソクラテスにとってポリスを形成するものであったように、ケネーにとって Société Civile を形成する Citoyen ではなかったか。

- 4) Schumpeter は「経済表」tableau というフランス語を英語では通例のごとく table とするよりも picture とした方が、その意味をよりよく伝えるようである。」とした。(Schumpeter, J. A., History of Economic Analysis, p. 239) Baudeau は1765年 Ephemerides du citoyen を創刊した。この雑誌は1766年ボードーの保護主義の改宗からフィジオクラートと同一されていた。(Schumpeter, J. A., History of Economic Analysis, p. 226)
- 5) Kuczynski, M. は Tableau Économique [3. Ausgabe, 1759] を基本にすべきであると主張し小池基之も同様に主張したが、すでに Tableau Économique においても Citoyen が論じられていた。[Tel est l'ordre distributif de la consommation des productions du cru entre les classes de citoyens, et telles est l'idée que l'on doit se former de l'usage et de l'étendue du commerce extérieur d'une nation agricole florissante. (p. 677)]
- 6) ケネーの produit net はマルクスの Mehrwert 概念に決定的影響を与え、ケネーの zig — zag はレオンチェフの産業連関分析に決定的影響を与えた。

Schumpeter は「経済学史」で「窮極において我々が今日欲するところのものはフィジオクラートがかって欲したところに外ならぬ。」と言った。(Schumpeter, J. A. (1914: 1924) 339 ページ)

- 7) Schumpeter は『経済分析の歴史』で「経済表」という業績の本質的部分は「循環的周流 (Der Kreislauf der Wirtschaft, circuit-flow) にあるという考え方であった。このような考え方は、医者であったケネーの心に、「人体における血液の循環との間の類推を通じてもたされたものであると仮定す

るのは魅力的である。ウィリアム・ハーベイ (William Harvey 1578-1657) による血液循環の発見は、当時すでに百年を経たものであったが、なおその清新さを少しも失ったものではなかった。〔「心臓及び血液の運動の解剖学的考察」1628年、*Exertatio anatomica de motu cordis et sanguinis* 1628.〕 (pp. 240-241)

- 8) ケネー自身「王立外科医学アカデミー紀要論文」で述べた。「内科医たちは、ハーベイによって、血液の循環が生命の原理である、と説得された時、故人のあらゆる見解にたいする盲信から、それに対する軽蔑に、早変わりした。人はもはや、若干の局所に適応した薬剤を認めようとはしなかった。血液の流れがこれらの薬剤を全身にはこぶから、これらの薬剤は身体の諸部分のすべてにたいして等しく作用すると言ったのである。しかし、最後には、正確な観察が、最も頑固な人々をもこれらの薬剤の効果についての故人の考えに立ちかえるようにさせたのである。それ故、血液の流れを我々に明らかにした自然学的実験は間違った意見を生み、観察のみがそれを打破しえたのである。観察は自然学的実験を訂正するだけでない、それは、新たな実験をも示唆するのである。それゆえ、観察がなければ新たな実験はけっして試みられないであろう。

観察は、外科医たちに、たとえば血札糸は静脈中の血液を富める、したがって、刺月各の傷口からの血液の流出を容易にさせるにはそれをゆるめる必要があるということをおしえた。この現象の原因は長い間秘められていた。しかしとうとう、研究心がよびさまされ、それに刺激されて試みがなされ、この試みによって、循環の秘密があばきだされたのである。」(平田清明訳 (昭和34)、257ページ)

「この発見はその起源たる観察そのものの中に、光をもたらした。観察は実験に通じ、実験は観察に光をあてるのである。それゆえ、この学術の完成につとめる人々は、観察から出発して観察に帰り、そうすることにより、実験からえられた結果を確証しなければならないのである。このような精神の進展は、ある観察とある実験とを和合させることだけが必要であるならば、困難ではないであろう。しかし、最初の数歩をふみだすと、もう困難がいたるところにあらわれている。もっとも簡単な諸真理すら、長い一連の観察と自然学的実験とを要求する。それらが、われわれの手中でふえたときは、それらの関連とそれらから出てくる諸結果とを明らかにする必要がある。不幸にして、人は、このような最初の仕事をやり終えても、なお、不完全な知識にしか達しないのである。我々は、真理がいつそうはっきりとしめされたときにも、その限界をも結果をも、ほとんどいつも見ない。あたらしい事実がわれわれの知識をいつそう遠くまで広げること、すなわち、人は若干の進歩をとげたのちふたたび実験と事実と観察とを新しい円環運動に入ることを、期待する必要があるのである。」(258ページ)

「明証論」で「明証 (evidence) という言葉は、精神が拒否しえないほど、それ自身で明確明かな確実性を意味する。……明証とは、自分の現実的感覚を経験しないことがわれわれに不可能であるのと同じく、拒否することがわれわれにできない確実性を、意味する。……広がりの代表的観念から、形状・大きさ・形態・位置・場所・近・遠・量・数・運動・休止・時間の継続・永続性・変化・関係等々の観念が生ずる。」(269-271ページ)

「自然法 (la lois naturelle) はすべての人々のまえに現れる。しかし、彼らはそれをさまざまに解釈する。そこで彼らには、彼らの行動を決定し確実にするために、一定の実定法規が必要である。かくて聡明な人々は、自己の関心事について吟味し熟慮する必要があるがほとんどないのである。彼らは、この法規とこの法規の命ずることにつねに忠実であって、この法規自体によって直接に決定されるのである。」(299ページ)

「明証的なこれらの第一真理は、超自然的な知識の基礎であり、自然的知識の第一発展過程であり、諸科学の基本的真理であり、知識の進歩において精神を指導する法則であり、一切の動物の、自己保存・欲望・性向・幸福・不幸に関連した行為の規則なのである。」(300ページ)

- 9) コルベール重商主義体系と言う「曲げ過ぎた棒をまっすぐにする」ために「その反対の方へ同じだけ曲げられた」ケネー「経済表」の世界をもとにもどすことがスミス「諸国民の富」の構想であった。(Smith A. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. vol. II. pp. 663-664)

スミスは Division of Labour をベティ (Petty) とマンデヴィル (Mandewill) から学んだがとくにベ

ティから多く学んだ。Political Arithmetic というペイコンの創始した帰納的方法が、科学は経験科学であって、ある合理的方法を感性的にあたえられたものに適用するところに成立する。帰納、分析、比較、観察、実験が合理的方法の主要条件である、とした。これに対してペティが創始した方法は、労働価値の理論をふまえた「解剖」であり「算術」であった。

ペティ研究者であるベブアンは次のように述べた。「我々が『国富論』の第一編を取り上げるならば、その内容の大部分を未熟な形においてペティの諸著作の中に見出すことが出来る。このことは分業およびそれを生起せしめる原理、価格・土地の賃料について確実に妥当する。国富の三つの源泉は、ペティの一小篇「賢者一言」において精密に識別されている。ペティは、改善された税制の貴重な基礎としてその明確さを力説したが、この原理を一層広く応用するという事を目的とはしなかった。ペティが貨幣の問題について述べたすべての事は、きわめて正確でしかも透徹しており、永久に偉大な価値がある。そしてスミスその他だれかれの著作者は、ペティが「政治解剖」に置いて、「租税貢納論」において、またそのたの著作において、すでにおこなった通貨の明快にして輝かしいとりあつかいの足跡を追い、これを繰り返しうるに過ぎないのである。」(W. L. Bevan, Petty., p. 100. 大内兵衛、「ペティの生涯と業績」105-106 ページ。「政治算術」218 ページ)

文献

- Diderot et d'Alembert (1751-1780), *Encyclopedie*. 桑原武夫訳篇 [百科全書・序論及び代表項目] 昭和46、岩波書店。
- Ferguson Adam (1995), *An Essay on the History of Civil Society*, Cambridge University Press.
- François Quesnay et *La Physiocratie*, (1958), I, II, Institut National D'Etudes Demographiques.
- Gonot, Pascale et Dubois Jean-Pierre, (2003), *Citoyenneté, souveraineté, société civile*, Editions Dalloz.
- Grant Michael (1965), *The Civilization of Europe*, Weidenfeld and Nicolson 20 New bond street London WI.
- Hobbes Thomas (1996), *Leviathan*, Cambridge University Press.
- Hobbes Thomas (1998), *On the Citizen*, Edited and Translated by Tuck Richard, Silverthorne, Cambridge University Press. 14.
- Kuczynski Marguerite, (1965), *Tableau économique von Francois Quesnay* [3. Ausgabe, 1759], Akademie-Verlag/Berlin.
- Petty, W., *Political Arithmetick, or A Discours concerning, The Extent and Value of Lands, People, Buildings; Hasbandry, Manufacture, Commerce, Fishery, Artisans, Seamen, Soldiers, Public Revenues, Interest, Taxes, Superlucration, Registries, Banks; Valuation of Men, Increasing of Seamen, of Molitia's, Harbours, Situation, Shipping, Power at Sea, &c. As the same relates to every Country in general, but more particularly to Territories of His Majesty of Greart Britain, and his Neighbours of Holland, Zealand, and France. The Economic Writings of Sir William Petty...* Edited by Charles Henry Hull. 2 Vols. Cambridge, at the University Press, 1889. 大内兵衛・松川七郎訳 (昭和30)「政治算術」岩波書店。
- Rousseau, Jean-Jacques (1962), *Du Contrat Social au Principes du droit politique*, Editions Garnier Freres 6, Rue des Saints-Peres, Paris.
- Schumpeter Joseph A. (1914: 1924), *Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte*, Grundriss der Sozialökonomik. 中山伊知郎・東畑精一訳「経済学史—学説並びに方法の諸段階—」昭和25、岩波書店。
- Schumpeter Joseph A. (1954), *History of Economic Analysis*, Edited from manuscript by Elizabeth Booddy Schumpeter, George Allen & Unwin Ltd, Ruskin House, Museum Street, London.
- Smith Adam (1981), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Volume 1, 2, Liberty Fund, Indianapolis. 大内兵衛・松川七郎訳「諸国民の富」1、2、昭和44、岩波書店。
- Smith Adam, *Glasgow University Library, MS Gen. 109. Juris Prudence or Notes from the Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arms delivered in the University of Glasgow by Adam Smith Professor of Moral*

Philosophy. MDCCLXVI. William Robert Scott, Adam Smith as student and professor, with unpublished documents, including parts of the "Edinburgh lectures", a draft of the Wealth of Nations, extracts from the muniments of the University of Glasgow and correspondence. Glasgow, 1937. part 3, An early draft of part of the Wealth of Nations (pp. 317-356) Glasgow University Library, Buchan papers. 水田洋 訳 (2005) 「法学講義」岩波書店。

久保田明光 (昭和 37) 『重農主義経済学—フィジオクラシー』前野書店。

小池基之 (1986) 『ケネー「経済表」再考』みすず書房。

島津亮二・菱山泉訳『ケネー全集 1. 2. 3』有斐閣、昭和 26-27。

菱山泉 (1990) 『ケネーからスラッフアへ』名古屋大学出版会。

戸田正雄・増井健一訳 (昭和 8) 『ケネー経済表』岩波書店。

平田清明訳 (昭和 34) 『ケネー著作集 (経済表他)』、『世界大思想全集』6、河出書房新社。

平田清明訳 (昭和 34) 「王立外科医学アカデミー紀要序文」、「明証論」、『世界大思想全集』6、河出書房新社。

東條隆進 (2005) 「アダム・スミスと市民社会」早稲田社会科学総合研究、第六巻第二号、早稲田社会科学学会。

東條隆進 (2006) 「Adam Smith の Division of Labour と Invisible hand」早稲田社会科学総合研究、第七巻第二号、早稲田社会科学学会。

東條隆進 (2007) 「Thomas Hobbes の De Cive (On the Citizen)」早稲田社会科学総合研究、早稲田社会科学学会。

東條隆進 (2007) 「John Locke の An Essay on the Poor Law」早稲田社会科学総合研究、早稲田社会科学学会。

